

## 一山一寧撰「頼賢の碑」と松島瑞巖寺

——御島妙覺庵の観鏡房頼賢の事跡をめぐって——

館 隆 志

はじめに

松島と言えば、万葉の昔より風光明媚で知られ、松尾芭蕉（一六四四―一六九四）も絶賛した日本三景の一つとして知られる。宮城県の海岸部中央に位置し、松島湾に大小二百六十余の島々が浮かび、長い年月による波浪浸食や、風化作用による自然美で、国の特別名勝にも指定されている。その松島に雄島という島がある。今は臨済宗妙心寺派の瑞巖寺の寺領であり、別に「瑞巖寺の奥の院」とも呼ばれ、朱塗りの渡月橋で陸と結ばれている。島内には、岩窟が点在し、修行僧が刻んだ卒塔婆や仏像、法名などが数多く見られ、さながら霊場と言った感じである。その雄島の南端には国の重要文化財「頼賢の碑」がある。今は六角形の覆堂に納められ、<sup>(1)</sup>その中を覗き見ることしか出来ないが、それが臨済宗虎丘派の一山一寧（一二四七―一三二七）の撰であることがわかる。さて一山一寧と言えば、元から渡来して鎌倉の建長寺や円覚寺に住した高僧である。しかし、「頼賢の碑」は松島の歴史を物語る碑文であること以外には、禅宗の歴史で触られることはこれまで全くといってなかった。そこで、本稿では一山一寧撰の「頼賢の碑」と

松島瑞巖寺（\*以後は円福寺と表記）の歴史的意義について考察を試みたい。

### 「頼賢の碑」

頼賢の碑は、鎌倉時代に作られた松島雄島の南端にそびえる石碑である。碑の高さは、三・三五mで、幅は、一・一三mで、厚さは〇・二二mであり、その板状の粘板岩（稲井石）の表面を上下に区画している。上欄は、縦横おのおの七・八cmに条の界線で区切られ、その中央よりやや上に「明」字、すなわち梵字の阿字が大きく刻まれ、阿字の右に「奥州御島妙覚菴」、阿字の左に「頼賢菴主行実銘并序」と措書で記してある。よって正式には「奥州御島妙覚菴頼賢菴主行実銘并序」とすべきなのであるが、一般的に「頼賢の碑」と言われていることから、本稿もそれにならい「頼賢の碑」と統一して表記しておくたい。碑の下欄は、縦一・六六m、横一・〇〇mに一条の界線をめぐらし、その中に十八行六百四十三字の碑文が草書で刻まれている。また、碑の周囲には雷文と唐草文、上欄と下欄の間には双竜の陽刻を配している。<sup>(2)</sup>

『松島町史』<sup>(3)</sup>、『宮城県史』十七（金石志）<sup>(4)</sup>と、『宮城郡誌』<sup>(5)</sup>には既に全文が提示されている。また、松本源吉氏の「松島雄島の頼賢の碑」<sup>(6)</sup>では詳細な考察が行われ、松本源吉氏の持つ拓本を元に、碑文を正確に読むことにとめてゐる。さらに、七海雅人氏は、『霊地・霊場・聖地』内の「松島」<sup>(7)</sup>において、『松島の板碑と歴史』<sup>(8)</sup>に所収される拓本や、東京大学史料編纂所所蔵の拓本なども用いて比較対照を行っている。他に『建長寺史・編年史料編』第一巻<sup>(9)</sup>にも原文の翻刻が納められているが、あくまで史料編であるため、禅宗史や歴史的研究という観点からは所見が見られない。そこで、本稿でも全文を再提示し、読み下しを加えておきたい。

碑文に関しては、すでに流布している活字を元に、瑞巖寺宝物館に所蔵展示される「頼賢碑拓影」によって確認を

試みた。なお判断しかねるものや、活字で諸説言われているものを中心に、瑞巖寺宝物館の堀野宗俊氏のご協力を得て、原碑による確認を行った。また、句点については、私なりに読み下し文に合わせ付け直し、旧字体のものは新字体に改めておきたい。

「頼賢の碑」

奥州御島妙覚菴 頼賢菴主行実銘並序

巨福山建長禪寺住山、唐僧一山一寧撰。

徳治丙午冬、予再居福山。丁未春、有僧匡心孤運、來礼謁言(一)來自奥州。手其師行実一通、炷香礼(二)足謂予曰、吾(三)鄉奥州有松島、其側有御島、有菴曰妙覚。乃曩歲、見仏上人來結茆而居。見仏清苦精進、身清嚴口緘默。日誦法華經、先十二年中已滿六万部。後至八十二入滅。厥後所誦、又不可以數計也。六根既淨、能使使神(四)物、靈異頗多、道乃遍(五)布、声聞朝野。適鳥羽院当宇、賜本尊器物、以旌異之。其島本名千松島、以見仏承御賜之故、時人乃易今名。凡松島左右、列島僅百數、独此名最揚、盖由見仏之故也。吾之師名頼賢、号観鏡房。生於本州源氏。幼而端(六)愿、父母俾出家、乃依長崎成福寺為童子。十五薙髮、而学天台及真言教于講席。久(七)之忽自悟謂、文字之学非出世法。至年四十二、今円覚無隱範(八)和尚住松島円福寺、往依之居弟子列。復遊方參聖一于東福、大覚于建長、仏源于寿福。孜孜請扣、法無異味。仍回円福、將終老焉。無隱遷相州淨妙、空巖慧和尚繼席。適此菴乏主者、空巖乃(九)挙師以補之。既居歷年、光(十)大振興、凡法社之未完者、咸修備之。口誦法華、心住禪寂、二十二年、影不出山、鬣為叢社、四衆攸婦。人謂、見仏上人之再世也。矧(十一)其天性慈和、略(十二)無畛畦待物、如一清澹安、怡(十三)精勤不怠、誠末法化物之儀範也。世寿今八十二、僧臘六十七、居处如平居時。度弟子三十余人。匡心孤運等、以師之徳之功、不著于後、我之責也。相与議立窆堵婆、以紀之。敢

求数語、以信于後。予聆其語、又覽其詞、因思。古之立道場振法門者、率(十四)由是道。賢(十五)師其由是道乎。

贊寧師、作僧伝、有興福一科。賢師其在斯科乎。既有補於法門、故為銘之。銘曰、

人惟德馨 地由人興 御島之菴 見仏始營 賢師後居 乃臻(十六)厥成 清明勝靜

開迷醒醒 慈善根力 克享脩齡

弟子樹茲窳堵婆、紀其德行。予為銘。

是歲三月十五日書。小師三十余人、匡心孤運同立石。

(一) 『松島町史』は、「云」とする。

(二) 七海氏は「礼」の一字を欠く。

(三) 『宮城郡誌』は「我」とする。

(四) 『宮城郡誌』は「神」の一字を欠く。

(五) 松本氏の拓本では欠く、判別不能とのこと。原碑と瑞巖寺宝物館所蔵「頼賢碑拓影」は共に判別しづらいが「遍」にみえる。

(六) 『宮城県史』は、「瑞」とする。「頼賢碑拓影」では判別つきにくい、原碑では「端」にみえる。

(七) 松本氏と『建長寺史』と『宮城県史』と『松島町史』は「人」とする。原碑と「頼賢碑拓影」ともに「久」にみえる。

(八) 『松島町史』では、「範」の一字を欠く。

(九) 松本氏と『建長寺史』と『宮城県史』は「及」とする。原碑と「頼賢碑拓影」ともに「乃」にみえる。

(十) この一字は原碑の石が欠けているため判別がつかず。七海氏も不明とする。諸本にならない「光」とした。欠けている箇所周りには、文字の端が残っている。これから推測すると「光」であった可能性は十分に

ある。

(十一) 七海氏は不明とする。

(十二) 松本氏の拓本では欠く、判別不能とのこと。七海氏も不明とする。「頼賢碑拓影」では判断つきにくいだが、原碑では「略」にみえる。

(十三) 松本氏は「恬」とする。原碑でも判断つきにくい。

(十四) 七海氏は不明とし「求」か「率」ではないかとする。原碑においては「率」にみえる。

(十五) 『宮城郡誌』は「賢」の一字を欠く。

(十六) 『建長寺史』と『宮城県史』は「達」とする。原碑と「頼賢碑拓影」とともに「臻」にみえる。

石碑に刻まれた碑文の書体を、一山一寧の自筆の書と『松島の板碑と歴史』所収の拓本とによって比較を試みた。一山一寧の自筆の書のうち、『統禪林墨蹟』上巻の「一山一寧墨蹟跋語」<sup>10)</sup>は、書体がかなり類似しているように思われる。よって、「頼賢の碑」の碑文は、もともと一山一寧自筆の書を基に、石碑に刻んだ可能性が高いと考えられる。

【読み下し】

奥州御島妙覚菴 頼賢菴主行実銘並びに序

巨福山建長禪寺住山、唐僧一山一寧、撰す。

徳治丙午（一一三〇六）の冬、予再び福山に居す。丁未（一一三〇七）の春、僧匡心・孤運有りて、来りて礼謁して言く、「奥州より来る」と。其の師の行実一通を手にし、炷香礼足して予に謂いて曰く、

吾が郷奥州に松島有り、其の側に御島有り、菴有り妙覺と曰う。乃ち曩歲、見仏上人來りて茹を結びて居す。見仏、清苦精進して、身は清嚴にして口は緘黙たり。日に法華經を誦し、先の十二年中に已に六万部に滿つ。後に八十二に至りて入滅す。厥の後に誦する所、又た数を以つて計るべからず。六根は既に淨く、能く神物を役使し、靈異は頗る多し、道は乃ち遍ねく布き、声は朝野に聞こゆ。適たま鳥羽院宇に当たり、本尊・器物を賜う、旌を以つて之を異とす。其の島、本と千松島と名け、見仏の御賜を承くるを以つての故に、時人乃ち今の名に易む。凡そ松島の左右、列島は僅に百數、独り此の名のみ最も揚ぐるは、盖し見仏に由るの故なり。吾の師の名は頼賢、觀鏡房と号し、本州の源氏に生まる。幼くして端愿にして、父母、出家せしめ、乃ち長崎の成福寺に依りて童子と爲る。十五にして薙髮して、天台及び真言の教を講席に学ぶ。久しくして忽ち自悟して謂く、「文字の学は出世の法に非ず」と。年四十二に至りて、今の円覺の無隱範和尚、松島の円福寺に住し、往きて之れに依り弟子の列に居す。復た遊方して聖一（円爾）を東福に、大覺（蘭溪道隆）を建長に、仏源（大休正念）を寿福に參ず。孜孜として請扣するに、法に異味無し。仍つて円福に回り、將に老を終えんとす。無隱、相州の淨妙に遷り、空巖慧和尚、席を繼ぐ。適たま此の菴、主たる者乏き、空巖乃ち師を挙げて以つて之を補せしむ。既に居して年を歴て、光は大いに振興し、凡そ法社の未だ完からざる者、咸く之を修備す。口に法華を誦え、心は禪寂に住し、二十二年、影は山を出でず、薨として叢社を爲し、四衆攸に帰す。人は謂う、「見仏上人の再世なり」と。矧んや其の天性は慈和にして、略は眇眇に物を待つ無く、一清の如く澹安にして、精勤を怡びて怠らず、誠に未法化物の儀範なり。世寿は今八十二、僧臘は六十七、居る処平居の時の如し。度する弟子三十余人。匡心・孤運等、師の徳の功を以つて、後に著さずは、我の責なり。相い互に議して窳堵婆を立て、以つて之を紀す。敢て數語を求め、以つて後に信ず。

予、其の語を聆き、又た其の詞を覽、因りて思う、古えの道場を立て法門を振う者、率むね是の道に由る。賢師、其

れはの道に由るか。賛寧師、僧伝を作り、興福の一科有り<sup>(1)</sup>。賢師、其れ斯の科に在るか。既に法門に補すること有り、故に為めに之れを銘す。銘に曰く、

人は惟だ徳の馨、地は人に由りて興こる。御島の菴、見仏始めて営む。賢師後に居し、乃ち厥の成るに臻る。清明勝静、迷いを開きて醒醒たり。慈善の根力、克く脩齡を享く。弟子、茲に窅堵婆を樹て、其の徳行を紀す。予為めに銘す。

是の歳三月十五日に書す。小師三十余人、匡心・孤運、同じく立石す。

### 見仏上人のこと

「頼賢の碑」の前半部分には、御島妙覺菴の由来と見仏上人についての消息が記されている。そこで、まず見仏上人について触れておきたい。見仏上人については「頼賢の碑」にも多少の記載が見られるが、『元亨釈書』卷九に<sup>(12)</sup>

#### 松島寺見仏

釈見仏。居奥州松島。其地東溟之浜、小嶼千百数、曲州環浦、奇峰異石、天下之絶境也。其尤者曰千松島、仏結茆而居。清勤苦練、一十二年。其間誦法華滿六万部、其後不計数、専壹持誦。世曰、既浄六根、役使鬼物、屢顯靈応。天仁帝聞道誉、賜仏像法器而以旌異之。依茲土人改千松曰御島。蓋境得人而顯、又人因境而伝也。年八十寂。

として伝記が見られる。まず一見して、「頼賢の碑」の記述と大変似ていることがわかる。これは、後述するように撰者である一山一寧に、『元亨釈書』の著者の虎関師鍊(二二七八―三三四六)が学んでいることに依るものであろう。他に、円福寺に所蔵される「天台記」<sup>(13)</sup>には、見仏上人の簡単な行実が記されている。この「天台記」については、

詳しくは後述するが、写本に写本を重ねたものである。扱うには十分な注意が必要である。ただし、見仏上人の行実中、唯一年記を載せるので、ここに抜粋して挙げる。

長治甲申ノ元年、伯州見仏上人此地下。而延福左右列嶋御島有。則□□庵建而居シテ、延福□□□秘事法執行。

元永己亥□□、鳥羽院為勅使大内藏□康光、而姫松一千本下給。則名千松島。

と記されている。次に述べる見仏上人の伝記には、「天台記」に載せる年記を用いて記したが、なお正確であるとは言い切れず参考までに年号を記すことをお断りし、以上の資料を用いて見仏上人の伝記について簡単に触れておきたい。

見仏上人は、伯耆（鳥取県）の人であるらしく、長治元年（一一〇四）に奥州松島の雄島に渡り、十二年にわたり厳しい修行をし、その間、法華經六万部をひたすら読誦した。靈験あらたかで、多くの奇跡を起こしたと伝えられる。円福寺の住持になることはなかったが、八十二歳にて示寂したとある。見仏上人の高僧としての名声は京にまで届き、元永二年（一一一九）に鳥羽天皇（一一〇三―一一五六）から仏像や法器、松の苗木千本が御賜された。これによりそれまで「千松島」と呼ばれていた名が「御島」と表記されるようになった。二百六十余りある松島の島々の中で、この「千松島」のみを「御島」と称えるのは、ひとえに見仏上人の徳と名声に寄るものである、と説明されている。

ただし「天台記」の年記には問題が存する。例えば、「頼賢の碑」には、鳥羽院（鳥羽上皇）とあるが、「元亨釈書」には、天仁帝（鳥羽天皇）と記されている。鳥羽天皇の即位の期間は嘉永二年（一一〇七）から保安四年（一一二二）であるので、元永二年にはまだ鳥羽天皇であるはずだが、「天台記」では鳥羽院と記されている。「頼賢の碑」には鳥羽院と明記されているので、これによれば、この出来事の年記は保安四年以降ということになる。よって、「天台記」に記される年号に関しては、写本の写本であることもふまえ、参考程度にとどめるべきであろう。

また、現在では松島の島々の中で最も由緒ある島であることから敬意を込めて、「御島」が雄なる島「雄島」（おし

ま」と書かれるようになったようである。<sup>(14)</sup>この他に、西行(一一一八―一一九〇)仮託の仏教説話集『撰集抄』卷三の「松島上人<sup>(15)</sup>」には、見仏上人の奇跡の一例ともいふべきことが語られている。以上の見仏上人の伝記は、主に「頼賢の碑」の記述と『元亨釈書』卷九「松島寺見仏」の章によつたが、年号に関しては、「天台記」の記述を基に記した。

### 観鏡房頼賢の事跡

碑の主人公である頼賢に関しては、「頼賢の碑」に記載の有ること以外には全くの不明であるので、これを基にする程度詳細な考察を試みておきたい。生年は、示寂年と世寿からして嘉祿二年(一二二六)であろう。本州すなわち奥州の源氏の生れとあるのみで、如何なる俗系であるかは不明である。幼くして父母によつて出家をした、端愿とあるから幼い頃より大変優秀であつたようだ。長崎の成福寺において童子となつた。十五歳で剃髪し、天台や真言の教を学ぶも、文字の学は出世の法ではないとして、文永四年(一二六七)に四十二歳で松島円福寺の無隠円範(一二三〇―一三〇七)のもとに参じる。その後、諸方歴遊し、円爾(一二〇二―一二八〇)を東福寺に、蘭溪道隆(一二二三―一二七八)を建長寺に、大休正念(一二二五―一二八九)を寿福寺に参じた。遂に、弘安九年(一二八六)に、円福寺にもどり再び無隠円範に参じようとしたが、無隠円範は既に鎌倉の浄妙寺に遷つていて、空巖慧和尚が住していた。空巖慧は、頼賢を妙覚菴の主として、以後、頼賢は島より出ることなく、二十二年間ひたすらに法華六万部を誦し続け、見仏上人の再来であると言われるようになった。徳治二年(一二三〇七)に、世寿八十二、僧臘は六十七で亡くなられた。弟子は三十余人で匡心・孤運などがいた。というのが頼賢の簡単な伝記である。また、妙覚菴に住した二僧、すなわち見仏上人と頼賢が共に八十二歳で示寂していることなどは、まさに頼賢こそ見仏上人の再世であるとされるべ

き僧であった、と言えるであろう。ただし、石碑中に「世寿今八十二」や「居処如平居時」と記されていることから、徳治二年の時点では、頼賢はなお存命していたものとも解される。<sup>(16)</sup>

「頼賢の碑」の先行研究は少なく、わずかに前述の松本源吉氏の「松島雄島の頼賢の碑」や入間田宣夫氏の研究<sup>(17)</sup>や七海雅人氏の「霊地・霊場・聖地」内の「松島」があるほか、「宮城県史蹟名勝天然記念物調査報告書」巻四<sup>(18)</sup>や、前述した「松島町史」などに記されている。他には久富哲雄氏の「芭蕉 曾良 等躬―資料と考察」に「曾良旅日記」と雄島の頼賢の碑<sup>(19)</sup>として触れられている程度である。「曾良旅日記」とは、松尾芭蕉に随行したことで知られる曾良（一六四九―一七二〇）の旅日記を中心とする覚書であり、その「曾良旅日記」の元禄二年（一六八九）五月九日条の雄島の項に、

雄島所、ヲ見ル。御島、雲居ノ坐禅堂有。ソノ南ニ寧一山ノ碑之文有。<sup>(20)</sup>

とあることから、「曾良旅日記」の記事を基に「頼賢の碑」の考察をしている。ただし、久富哲雄氏は、頼賢を「総合仏教大辞典」(法蔵館)<sup>(21)</sup>より引用し意教上人頼賢と呼ばれた僧であろうと述べられている。しかし、意教上人頼賢（一一九六―一二七三）とは永平門下義準とも関わりがあった僧であり、松島に居した頼賢（一二二六―一三〇七）とは全くの別人である。意教上人頼賢に関しては佐藤秀孝氏の「越前永徳寺義準と意教上人頼賢——義準の永平寺僧団離脱前後の動静について」<sup>(22)</sup>などの論文に記述が見られる。

#### 撰者一山一寧について

ここで「頼賢の碑」の撰者である一山一寧について簡単に触れておきたい。一山一寧の伝記は同時代に活躍し、一山一寧に参じたこともある虎関師鍊が「一山国師行記」<sup>(23)</sup>を撰しており、同じく虎関師鍊の「元亨釈書」巻八<sup>(24)</sup>にも伝記

が収められている。台州（浙江省）臨海県の胡氏の出身で、無等慧融について出家した。法明文節に天台を学び、天童山の簡翁居敬や、阿育王山の藏叟善珍（一一九四―一二七七）等に参じて、頑極行彌にその法を嗣いだ。その後、天童山の環溪惟一（一二〇二―一二八二）などにも参じている。正安元年（一二九八）に、普陀山の観音寺の住持を勤めていた折りに、元の使者として再来日の西礪子曇（一二四九―一三〇六）と共に商船に乗り、翌年正安二年（一二九九）に博多に帰着した。一時伊豆の修禅寺に幽閉される。同年十二月に北条貞時（一二七一―一三二一）は一山一寧を建長寺の住持に、西礪子曇を円覚寺の住持にした。『一山国師語録』巻上の「兼住相模州瑞鹿山円覚興聖禅寺語録」によれば乾元元年（一二三〇）の十月十一日に西礪子曇の後を受けて円覚寺に住持をしている。一時、一山一寧は建長寺・円覚寺を兼管したこともあったようで、おおよそ四年ほど円覚寺の住持をしている。『一山国師語録』巻上の「再住巨福山建長興国禅寺語録」によれば徳治元年（一二三〇）の九月二十六日に亡くなった鏡堂覚円（一二四四―一三〇六）の遺書が届く上堂「鏡堂和尚遺書至」<sup>(26)</sup>があるので、少なくとも徳治元年（一二三〇）九月頃までには一山一寧は建長寺に再住していたとみられる。ちなみに、虎関師鍊の行実を記した『海蔵和尚紀年録』の徳治二年丁未条には、「師三十歳、春、行相州、從寧一山于巨福。夏四月二十四日、山因病、退居于常楽庵。」とあり、虎関師鍊が徳治二年（一二三〇）の春に一山一寧に参じており、同年四月二十四日に一山一寧が建長寺を再び退居していることが知られる。一山一寧退居後の建長寺には、同年の十二月二十九日に南浦紹明（一二三五―一三〇八）が入山している<sup>(28)</sup>。その後、一山一寧は浄智寺に住し、正和二年（一二三三）八月、規庵祖円（一二六一―一三二三）示寂の後を受けて南禅寺の住持となり、文保元年（一二三七）十二月二十四日に七十一歳にて示寂した。

さてここで「頼賢の碑」と一山一寧について考察してみると、「頼賢の碑」に「徳治丙午冬、予再居福山。」とあることは、『一山国師語録』よりの推測であった徳治元年（一二三〇）の九月頃に建長寺に再住していたのではないかということを追認できる。さらには「頼賢の碑」を書いた徳治二年（一二三〇）三月十五日に建長寺の住持をしているこ

とも、『海蔵和尚紀年録』の記事と符号している。『一山国師語録』や他の諸記録にも頼賢や松島に関する記述が見られないことは残念ではあるが、見仏上人の業績が一山一寧を介して虎関師鍊の『元亨釈書』に収録されていることは、虎関師鍊が一山一寧に参学した具体的事例として「頼賢の碑」を通して知られるのである。

無隠円範について

「頼賢の碑」の碑文中には頼賢が円福寺の無隠範和尚に参したと記されている。無隠範とは臨済宗大覚派の無隠円範のことであり、鎌倉の円覚寺・建長寺に住しているが、詳細は不明である。無隠円範の伝記については、玉村竹二氏の『五山禅僧伝記集成』<sup>(29)</sup>と、『禅学大辞典』<sup>(30)</sup>等にすでに記載が存しているが、この碑文中の文章により今まで不明であった無隠円範の事蹟が多少なり判明する。そこで、先に江戸時代の僧伝資料より判明する無隠円範の事蹟を明らかにしておきたい。

まず『延宝伝灯録』<sup>(31)</sup>第十六には

相州建長無隠円範禅師。紀州人。妙年出家、依大覚久。後南遊入元、尋問飢饉。帰省大覚、遂卸角駄。遷歴建仁円覚建長、晚居伝芳菴。徳治二年中冬十三日、書偈遷化。偈曰、来去無方行、去来更没蹤、要知吾住处、明月與清風。寿七十八。塔于本菴。敕諡覚雄禅師。

と記されており、つぎに『本朝高僧伝』<sup>(32)</sup>第二十二には、

相州建長寺沙門円範伝

円範。字無隠。不考其族譜。紀州人也。妙年出家。随侍大覚禅師、多歴年所。辞去入元、飢遊叢社。帰観大覚、徹證玄機。永仁初住維之建仁、移相之円覚建長。提綱整肅、衆會帰心、年垂耄期、謝事居伝芳菴。徳治二年十一

月十三日無病而化。辞世偈曰、来去無方行、去来更没蹤、要知吾住处、明月與清風。寿七十八。弟子等収靈骨、各塔于本庵、在洛之東山、相之福山、共曰伝芳。敕諡覚雄禪師。

と記されている。ともに、極めて簡略な伝記である。そこで、さらに『五山禅僧伝記集成』と『禅学大辞典』等により補足を加え、その略歴を挙げておきたい。

諱は円範、号は無隠。紀伊(和歌山県)出身の人である。幼くして出家し、蘭溪道隆に参じ、後に入元したとされる。しかし、蘭溪道隆との関わりや年号的なことを考慮すれば、入元ではなく入宋であったと解される。帰朝して再び蘭溪道隆に参じ、嗣香を通じてその法を嗣いだ。永仁二年(一二九四)頃から五年頃まで、京都の建仁寺に十五世として住持を勤めている。後に鎌倉に赴き、建長寺並びに円覚寺において住持を勤めている。晩年に建仁寺の伝芳庵に退居し、徳治二年(一二三〇七)十一月十三日に示寂した。寿七十八歳。後に勅にて覚雄禪師と諡された。法嗣には、雲山智越・葦山賢仙・定巖円一・先叟智定・鈍庵□俊などがある。また、夢窓疎石(一二七五―一三五二)は幼少の頃に、建仁寺の無隠円範のもとで参学しており、智曜という法名であった。

以上が大まかな略歴であり、これまでの資料により判明する点である。そこで、「頼賢の碑」により新たに判明する点をここに挙げておきたい。

① 文永四年(一二六七)に頼賢が松島円福寺に参じた時の住持が無隠円範である。また、この時に既に住持をしているということは、帰朝後に蘭溪道隆に参じる為には、文永四年(一二六七)より前に入宋し、帰朝していただければならない。入宋の期間や入宋時の師などは不明である。

② 弘安九年(一二八六)に頼賢が再び松島円福寺に無隠円範を訪ねた時、無隠円範はすでに浄妙寺に遷っていた。また、頼賢が円福寺を訪ねた時、空巖慧が住持を勤めていた。

③ 徳治二年(一二三〇七)三月十五日に、無隠円範は円覚寺の住持をしていることが判る。秋潤道泉(一二六三―一

三三三)が円覚寺住持の無隠円範に参じて乗拂を勤めている。玉村竹二氏の『秋澗泉和尚語録』の解題(五山文学新集)第六卷<sup>(33)</sup>には、語録を上堂の順番に並び替えた結果として、おそらく徳治元年(一二〇七)の結夏であるうとの指摘があり、「頼賢の碑」の記述によってそのことを追認することができる。

更に、今回の調査の過程において『大覚禪師語録』<sup>(34)</sup>と『雲桃鈔』中に、無隠円範に関する興味深い記事を見つけたことができた。無隠円範のことはこれまでほとんど触れられてきたことがない為、この機会に紹介しておきたい。

先に『大覚禪師語録』について紹介すると、まず一点目であるが、『大覚禪師語録』巻上の「相州巨福山建長禪師語録」<sup>(35)</sup>が、「侍者覚慧円範編」となっていることであろう。蘭溪道隆が建長寺に最初に住したのは建長元年(一二四九)のことである。それから弘長二年(一二六二)の一月頃まで建長寺に住しており、このことは語録とも符号している。よって無隠円範も『大覚禪師語録』がはじまる建長六年(一二五四)〜弘長二年(一二六二)の間は建長寺において蘭溪道隆に参学し、建長寺で侍者を務めていたと見るべきであろう。

もう一点は、『大覚禪師語録』巻下の「法語」の中に、「示円範藏主」<sup>(36)</sup>が存することである。この法語には、無隠円範が入宋を志し、蘭溪道隆にその旨を告げにいったこと。並びに、その入宋にあたり蘭溪道隆に自身の道号を求めた紙を差し出したこと。それに対して蘭溪道隆は、建仁寺の藏主であった円範に「無隠」の二字を授けたことが記されている。しかも、冒頭には、「東西両刹道聚教年」と記されている。東西の両刹とは、蘭溪道隆が住持した建長寺と建仁寺のことだと考えられる。よって、無隠円範も鎌倉の建長寺に引き続き京都東山の建仁寺にも随侍していたとみられる。以上のことを踏まえ、新しく判ったことを引き続き箇条書きにしてみると、

- ④ 蘭溪道隆が建長寺に住した間で、『大覚禪師語録』のはじまる建長六年(一二五四)〜弘長二年(一二六二)であるが、無隠円範は建長寺で侍者を勤め、語録の編集に携わっていた。弟子の中でも中心人物であったと思われる。また、この時点で侍者であることはそれよりもかなり前に、恐らくは蘭溪道隆が来朝した直後から参学して

いたのではないかと考えられる。大覚派の僧侶の中でかなりの中心的な人物であったと解される。侍者であるためには、語学はかなり堪能でなければならず、日本僧でありながら、中国語に堪能であったことがうかがえる。

- ⑤ 蘭溪道隆が建仁寺に住した際も、弘長二年（二二六二）であるが、引き続きその会下にあり、役職は建仁寺の藏主であった。この時に、入宋を志し、蘭溪道隆に道号を授かることを求める。蘭溪道隆は、円範藏主に「無隠」の二字を授けたのである。また、これによって、入宋の期間は、長くても弘長二年（二二六二）から文永四年（二二六五）の六年間のことであり、恐らく、帰朝後に再び蘭溪道隆に参じたのは、文永二年（二二六五）に建仁寺に再住する前で、建仁寺に住持中であろうか、もしくは松島円福寺に参じたのかもしれない。おおよそ二・三年の入宋であったと考えるべきであろう。

以上の二点が『大覚禪師語録』により判明した点であり、これにより今まで不明であった無隠円範の伝記がかなり判明したのでは無いかと思われる。

次に、『雲桃鈔』についてである。『雲桃鈔』とは、東福寺雲章一慶（一三八六―一四五九）の『勅修百丈清規』の講義を、相国寺桃源瑞仙（一四三二―一四八六）が筆録したものであり、建仁寺両足院に『桃源鈔』<sup>37</sup>となつて現存しており、この『桃源鈔』の講義は長祿三年（一四五九）から寛正三年（一四六二）に終っている。『雲桃鈔』に関しては、大石守雄氏の「雲桃鈔の一考察」<sup>38</sup>などがある。この『雲桃鈔』の中に、蘭溪道隆と無隠円範に関する大変興味深い記事を見つけることが出来た。既に『五山文学全集』別巻の「範無隠と大覚録」<sup>39</sup>に紹介されているが、再びここで紹介しておきたい。

日本ノ大覚禪師ハ我録ヲ、弟子ノ無隠ト云フ人ニ、モタセテ、唐土ヘ渡シテ、冲痴絶ノ証明ヲ請ヘト、オセラレタレハ、痴絶ハ、ハヤ入滅アツタホトニ、愚虚堂ニ請テ歸タレハ、機嫌カワルウテ、座ヲ遂立ラレタリ、昔モ証明アルヲハ寛要ト心得ラレタシ

これによると、無隠円範が入宋する際に、蘭溪道隆が語録を持たせ、痴絶道冲(一一六九—一二五〇)に証明を請するよう命じた。これは蘭溪道隆が入宋前に痴絶道冲に参じていることに加え、痴絶道冲が蘭溪道隆と同じく密庵咸傑(一一二八—一一八六)の系統にあたるからであろう。しかし、痴絶道冲がすでに示寂していたため、同じく密庵咸傑の系統で、蘭溪道隆と同じ松源派下の虚堂智愚(一一八五—一二六九)に参じて、その証明を得て帰朝したが、蘭溪道隆は、機嫌が悪くなり座を立った。という話が伝えられている。

年代的なことを考察すれば、蘭溪道隆の渡来は、寛元四年(一二四六)であるので、蘭溪道隆の渡来以後に痴絶道冲が示寂していることになる。しかし、現今に流布する『大覚禪師語録』の虚堂智愚の跋文の末尾には「景定甲子春二月、虚堂智愚書于浄慈宗鏡堂<sup>(40)</sup>」と記されていることから、この跋文が書かれたのは景定五年(一二六四)である。となると、痴絶道冲の死後より十年以上たっていることを蘭溪道隆や無隠円範が知らなかったとは考えづらい。ただし、無隠円範の入宋は虚堂智愚の存命中であり、しかも跋文を得た景定五年(一二六四)は、まさに入宋中と思われる時期のことであることから、「頼賢の碑」と『大覚禪師語録』より得られた事実とは符号していると言えるが、『雲桃鈔』そのものが虚堂智愚の跋文を得た二〇〇年近く後に編纂されたものであるので、このことに関してはまだまだ考察の余地が存する。

また、これと同様の話が、瑞溪周鳳(一二三九—一四七三)の『臥雲日件録抜尤』一(第五)、「文安五年戊辰四月一日」の条<sup>(41)</sup>に伝えられており、ここでは、「東福光藏院直宗」が蘭溪道隆の語録を持参したことになる。ここでいう直宗とは直翁智侃(一二四五—一三三三)のことであり、佐藤秀孝氏の「蘭溪道隆と虚堂智愚——とくに直翁智侃と『蘭谿和尚語録』の校訂をめぐる——」<sup>(42)</sup>に詳しく論じられている。また、佐藤秀孝氏に指摘のある、『大覚禪師語録』出版の功勞者である建仁寺監寺の禅忍であるが、その禅忍の入宋時期と、今回の調査で判明した無隠円範の入宋時期が期を一にしていることが判明した。よって、この禅忍と同じく入宋した僧の中に無隠円範も含まれていると

見てまちがいないであろう。そこで、

⑥ おそらく、入宋した際、景定五年（一二六四）に浄慈寺の虚堂智愚に参じて、蘭溪道隆の語録に跋文を得た僧（禅忍・直翁智侃）の一人に無隠円範もいたことになろう。

とすべきであろう。しかし、残念ながら『大覚禅師語録』は建仁寺住持までの記録しかなく、松島の下向のことも書かれていない。

また、同じく虚堂智愚に語録を呈して跋文を得た僧に、永平門下で順徳天皇の皇子と言われる寒巖義尹（一二二七—一三〇〇）がいる。寒巖義尹は道元（一二〇〇—一二五三）の語録十卷を持して入宋して、明州瑞巖寺の無外義遠に参じ序文と跋文を乞うている。この時、無外義遠はこの道元の語録を十分の一に抜粹校訂して『永平元禅師語録』（\*通称『永平略録』）を編して、景定四年（一二六四）十一月一日に序文を、咸淳元年（一二六五）の書雲の日に題跋を書いている。続いて同年三月に霊隠寺の退耕徳寧、同じく三月に浄慈寺の虚堂智愚に跋文を得ている。無隠円範とは同時期に義尹が虚堂智愚に謁して語録に跋文を得ていることが知られるのである。

ところが、入宋のおおよその期間が判明したことによって、無隠円範が帰朝後のまもない間に円福寺に住持をしていることがますます不思議に思えてしまうのである。なぜ紀伊出身の無隠円範は遠く奥州松島の円福寺で住持をしているのであろうか。そこで、つぎに松島円福寺の考察を試みておきたい。

### 円福寺について

松島の国宝瑞巖寺は、もともと天台の寺院であり、青龍山延福寺といった。延福寺が、円福寺と改められるのは、十三世紀中ごろに禅宗に改められてからである。今は正式名称を「青龍山瑞巖円福禅寺」と言うが、通称で「瑞巖

寺」と言われるようになったのは江戸時代に伊達政宗（一五六七—一六三六）が改修して以降のことである。<sup>(44)</sup> よって本稿では円福寺で統一して表記しておきたい。寺内に所蔵される「天台記」によれば、その創建は慈覚大師円仁（七九四—八六四）と伝えられており、その後四百年ほど続いたが、荒廢して、天台としての寺歴は途絶えたとある。十三世紀の中ごろに性西法心（法身）によって禅宗に改められたというが、正確な年時は不明である。「天台記」によれば、「正元己未元年、法身和尚延福住」とあり、正元元年（一二五九）に性西法心が円福寺に住したと記されている。円福寺の歴史については、この地方に於いて相当な寺格を保っていた為に、多くの伝説や逸話が存在している。<sup>(45)</sup>

円福寺には「天台記」なる寺伝が存在しその歴史を考察する上で重要となるのであるが、この「天台記」は末尾に「文明二年庚寅歲孟春中五日 奥州松嶋八屋左次郎重潘書写」と記されているので文明二年（二四七〇）の書写とも思われるが、入間田宣夫氏によれば、筆跡・料紙・印記などの詳細な観察の結果、これを更に江戸時代に書写したものであると鑑定している。<sup>(46)</sup> よって、写本に写本を重ねたものであり、その扱いは十分な注意を払わねばなるまい。この「天台記」には、円福寺の歴住が五十六世の茂林和尚まで記されている。円福寺の歴住を記すものには、他に、慶長四年（一五九九）に円福寺九十六世の陽巖宗純に依って書かれた「松島山円福禪寺住持次第」や、寛文十三年（一六七三）に円福寺一〇一世の鵬雲東臈によって書かれた「前住松島交名」<sup>(47)</sup> などがあり、これらも参照すべきであろう。

そこで、「天台記」に記されている歴住をここに挙げておきたい。円福寺に伝わる「天台記」の中に「松島青竜山円福禪寺前住記」と記され、それに続き「法身大和尚 大覚祥師 義海大和尚 覚雄禪師 知覚和尚 覺滿禪師 靈巖昭和尙 千峰立和尙 独照和尙 明極愚和尙（後略）」と記されている。これを判り易くしてみると、一世法身、二世蘭溪道隆、三世の義海は不明であるが大覚派の系統を考えれば恐らくは義翁紹仁であろうと言われている。<sup>(48)</sup> ただし、義海という大覚派の僧がいたとしても不思議ではない。<sup>(49)</sup> 四世無隱円範、五世桑田道海、六世空巖慧、七世靈巖道

昭、八世千峰本立、九世独照祖輝、十世明極聡愚である。

開山の法身とは、性西法心とも言われ俗名は真壁平四郎と言う。「元亨釈書」巻六の「松島寺法心」<sup>(50)</sup>や、無住の仏教説話集「沙石集」<sup>(51)</sup>にもその記述が見られる。また、前述の円福寺に関する諸本に触れられているほか、近年のものとして鈴木常光氏の「法身覚了無一物——法心禪師真壁平四郎の生涯」<sup>(52)</sup>などがある。「元亨釈書」巻六「松島寺法心」の章には、「帰朝居奥州松島」とあるので住したことは間違いないであろうし、年代的にも円福寺の開山とすべきであろう。性西法心という名については、号を性才とするか性西とするか、諱を法心とするか法身とするかという問題がある。玉村竹二氏は性西法心が正しいとしており、鈴木常光氏は記述の有るものを列記して法心の記述の方が古いであろうとしている。本稿においては、性西法心と表記しておきたい。性西法心は入宋して径山の無準師範（一一七七一—二四九）に参じて法を嗣いでおり、蘭溪道隆も来日する以前に無準師範に参学した経由が存する。

さて二世以下の僧侶は、その多くが蘭溪道隆の門下、いわゆる大覚派と呼ばれる僧である。実際には、義海が義翁紹仁であろうと仮定したならば、十世の明極聡愚までは大覚派の僧侶であり、三世義翁紹仁、四世無隠円範、五世桑田道海（？—一三〇九）までは全て蘭溪道隆の法嗣である。七世の靈巖道昭が桑田道海の法嗣で、八世千峰本立が蘭溪道隆法嗣の無及徳詮の法嗣、九世独照祖輝（一二六二—一三三五）は義翁紹仁の法嗣である。十世の明極聡愚は、円福寺の雲版に「住持明極誌 嘉曆丙寅秋」とその銘が刻まれているほか、「円覚寺文書」内の「北条貞時十三年忌供養記」<sup>(53)</sup>に、元亨三年（一一三三）の北条貞時（一二七一—一三一一）の十三回忌供養の請僧に「円福寺聡愚」と名が見えている。この明極の銘のある雲版<sup>(54)</sup>については古くは渡来僧である明極楚俊（一二六一—一三三六）を指すのでは無いかとされていたようであるが、嘉曆元年（一一三二）が明極楚俊の渡来前であることなどから、後年の追刻ということになってしまふ。しかし、玉村竹二氏が『五山禅僧伝記集成』の「明極聡愚」の項<sup>(55)</sup>において指摘している通り、円福寺雲板の銘の明極は明極聡愚が正しいであろう。更に、玉村竹二氏は、この諱の聡の字から、大覚派の葦航道然の

系統に使われていることから、この明極聰愚が大覚派葦航派下の人であると結論付けられたのである。

### 円福寺六世空巖慧について

ただし、六世で「頼賢の碑」にもその名が見える空巖慧<sup>(36)</sup>であるが、前掲の入間田宣夫氏の論文には、蘭溪道隆の法嗣であったように書かれている。これは「松島諸勝記」<sup>(37)</sup>に伝えられる、円福寺内の法雲庵に存したとされる空巖慧の画像への一山一寧賛によるものであろうか。円福寺百三世の夢庵如幻によって享保元年（一七一六）に書かれた『松島諸勝記』によってその賛文を紹介すると

超然氣宇不群、盎然和煦如春。早年誤飲蘭溪水。老去自看松島雲。婆和中方便、談管裡驗人、強把虛空描邈。何曾的是渠真如。如何是渠真。智海機先著眼筋。右松島円福空巖慧禪師肖像、小師智海求讚、嘉元癸卯秋末、円寛一山一寧。其像讚現今秘置于法雲也。<sup>(38)</sup>

と記されている。入間田宣夫氏の説はこの文中に「早年にして誤つて蘭溪の水を飲む」と有ることに依つたものであるうか。玉村竹二氏の『五山禅林宗派図』<sup>(39)</sup>や『禅学大辞典』禅宗法系譜に於いても、弟子の中に空巖慧の名を確認できなかつた。しかし、円福寺の住持の次第を考えるならば、蘭溪道隆の法嗣であつたことも十分にあり得るといえる。また、『松島諸勝記』という資料の扱いには注意せねばならないが、空巖慧の画像の賛文が、「頼賢の碑」の撰者と同じく一山一寧であることは、鎌倉と松島の関係を考察する上で重視すべきであろう。『松島諸勝記』が撰述された当時、この肖像画が法雲庵に存していたことが記されており、嘉元元年秋（一三〇三）に、空巖慧の賛を求めて円覚寺の一山一寧のもとに空巖慧の弟子智海が参じていたことになる。また、その後これを縁として頼賢の弟子であつた匡心・孤運も一山一寧を訪ねたということになるう。

この他に、入元僧の復庵宗己（二二八〇～一三五八）なども幼少のころ円福寺の空巖慧のもとに参じている。復庵宗己は、後に古先印元・無隠元晦・明叟齊哲らと共に入元し、幻住派祖の中峰明本（二二六三～一三三三）に参じて、後その法を嗣いでいる。復庵宗己が空巖慧に参学したことを記すものとしては、『法雲雜記』<sup>(60)</sup>に、

常州路新治郡高岡縣、大雄山法雲禪寺第二世、大光禪師復庵宗己大和尚。姓源氏宮家（或佐竹、或羽生）、人王九十代。後字多院弘安三年庚辰誕生。小田民部少輔治久之猶子也。幼而有出塵志、初依空巖和尚、學金剛乘教。〈空巖未知其人也、蓋奥之円福住持有、空巖惠和尚、此人乎古修顯密禪故〉。極其奥義、後更衣歷遍禪林。（後略）

と記されており、復庵宗己が空巖慧に参じていたと見られる。しかし、『常州大雄山法雲寺開山大光禪師語録』<sup>(61)</sup>内の「勅諡大光禪師復庵己和尚行状」には、この空巖慧への参学のことは記されていない。そこで『大光禪師語録』を調べてみると、語録中に

大光禪師真贊 性景禪尼請 實翁秀和尚

得空巖不空之智、負恩報恩。承幻住如幻之術、以冤酬冤。二十余年、談禪病講教理。三處法席、澍甘雨布慈雲。

雖然終老丘嶽、争奈老光聲四聞。蹤跡至今藏不得、天華動地落終々。

とあることから、これによって空巖慧への参学を知ることができる。

また、宗久の『都のつと』<sup>(62)</sup>には、

法雲寺といふ寺あり。宗己庵主とて、空岩和尚の高弟にておはしけるが、在唐ひさしくたまひて天目の中峰和尚などにも見え給ひけるとかや。

とあり、空岩（巖）の弟子に宗己庵主がおり、中峰明本に参じていたと記されている。復庵宗己が存命中である観応年間（一二五〇～一二五二）の頃に書かれた宗久の『都のつと』に、この記述が存することなどは、復庵宗己が空巖慧

に参学した事実を裏付けると言えよう。また、宗久は法雲寺に滞在し、おそらくは復庵宗已とも相見していたと考えられ、復庵宗已の空巖慧への参学は宗久が直接伝聞したものを書き記したと見るべきなのかもしれない。

さらに、六世空巖慧については、注目すべき記事が存する。それは、『鏡堂和尚語録』巻二「小参」の「建長開山大覚禪師十三年大忌普説」<sup>64</sup>に、「今日乃是松島惠長老、為其先師大覚和尚十三年大忌、請某普説。」と記されているからである。玉村竹二氏は『五山文学新集』巻六の『鏡堂和尚語録』の中で、この「松島惠長老」を、海山寂恵と補記している。海山寂恵については後述するが、おそらく円福寺の十二世として記録される海山□恵のことであろう。しかし、蘭溪道隆の十三回忌は、正応三年（一二九〇）にあたるので、十世として記録される明極聡愚が元亨三年（一二三三）の北条貞時の十三回忌供養の請僧として記録されることを考えると、住持世代に矛盾が生じてしまうことになる。

そこで、本稿では、『鏡堂和尚語録』中の「松島惠長老」を、六世の空巖慧（恵）のことではないかと推測しておきたい。「頼賢の碑」により、弘安九年（一二八六）に頼賢が再び松島円福寺に無隠円範を訪ねた時には、空巖慧が既に円福寺に住持していたことが知られる。よって、正応三年（一二九〇）に円福寺の住持である「松島惠長老」は、六世の空巖慧（恵）のことだと考えられる。玉村竹二氏の指摘は、「頼賢の碑」の碑文を見ていなかったからである。また、「建長開山大覚禪師十三年大忌普説」には、「嗣法比丘某、在開山会下」とあり、ここで言う嗣法比丘とは、空巖慧のことであろう。よって、空巖慧が、蘭溪道隆の法嗣であったことが判明したのである。

さて、以上の考察を踏まえた上で空巖慧に関する仮説をここに提示しておきたい。それは、前述したように、「大覚禪師語録」巻上の「相州巨福山建長禪寺語録」が「侍者覚慧円範編」となっていることである。つまり、語録の編者として、無隠円範のほかに覚慧侍者がいたことが記されている。ここでいう覚慧とは、すなわち空巖□慧その人のことではないだろうか。蘭溪道隆の法嗣として記録される僧に慧の字を諱の下字に持つ僧侶はほかに存しないので

あるから、その可能性は高く、また、「頼賢の碑」や、円福寺の歴住に見られる四世無隠円範と六世空巖慧の関係や、空巖慧が蘭溪道隆の法嗣であることなどを踏まえ、空巖慧はすなわち空巖覚慧のことであろうと解される。このように考えれば、無隠円範と空巖覚慧は、建長寺において共に蘭溪道隆に参学し、語録の編纂に関わり、松島の円福寺で住持を勤めていたということになる。

#### 円福寺の歴住十一世以降のこと

さて以上、十世までの大覚派の法系は入間田宣夫氏も指摘されていた。そこで、円福寺歴住の十一世以降について簡単に考察しておきたい。なぜならば、十世までこれほど大覚派によって守られてきた円福寺が突然他派のみが住する寺院になるとは考えにくいからである。「天台記」に記される歴住は十一世以降にはほとんど道号のみを載せているのであるが、そこから大覚派でないかと疑われる人物を数人抜き出してみると「十二世海山」「十八世鈍夫」「二十世宝山」「二十一世決翁」などが上げられる。十二世として記される海山とは蘭溪道隆法嗣の、海山寂慧のことではないだろうか。この円福寺十二世を海山至恵としているものもあるが（\*「松島山円福禅寺住持次第」では海山□慧、「前住松島交名」には海山□恵となっている）、本稿では、円福寺と大覚派の関係より円福寺十二世は海山寂慧ではないかと推測しておきたい。また、十八世の鈍夫とは、円福寺七世靈巖道昭法嗣の鈍夫全快（？）（一三八四）のことであると解される。

ここで問題となるのは二十世の「宝山」である。この二十世の宝山は、大覚派という観点から見れば同じく靈巖道昭法嗣の宝山慈環のことではないかとも思われる。ただし、問題となるのは、円福寺の十九世に「廉溪」と記されているからである。この廉溪とは廉溪秀夫のことであり、『法雲雜記』には法雲寺の第七世と記されている。常陸高岡

の法雲寺は、復庵宗己が中峰明本を勧請開山にして開いた寺院である。前述したように、復庵宗己は幼少のころ円福寺六世の空巖慧のもとに参じていることから、その交流により廉溪秀夫が円福寺で住持をしていると考えられる。また、後述するように、中巖円月の『東海一漚集』には、「松島請廉谿疏」が記されている。廉溪秀夫の法系は不明であるが、「松島請廉谿疏」によれば、大鑑の法席すなわち清拙正澄（二七四―三三九）の元で書記を勤め、千光の道場すなわち建仁寺において首座を勤めていることを知ることが出来る。問題は、法雲寺の八世に、復庵宗己法嗣の宝山明琳が記されていることである。復庵宗己の空巖慧への参学により、円福寺と法雲寺との多少なりの交流があったことが判明した。これによって二十世宝山を特定することが出来なくなってしまう。よって、ここでは靈巖道昭法嗣の宝山慈瓊・復庵宗己法嗣の宝山明琳の両説を挙げざるをえない。

他には、二十一世の「決翁」である。「快翁」と記しているものもあり、「松島山円福禅寺住持次第」を見ると「快」と読めなくも無い。しかし、「前任松島交名」では明らかに「決」になっているように思われる。因みに、「天台記」には二十宝山と二十一世決翁は抜けていたらしく、後に増筆してある。「決翁」であった場合には、蘭溪道隆法嗣の約翁徳俊（二四四―三三〇）法嗣の決翁元勝（？―三六九）のことではないかと推測される。道号よりの推測ではあるが年代的にはおおよそ問題ないであろう。当然これ以降の円福寺世代にも大覚派を疑える僧は多く存するのであるが、本稿では以上に止め別の機会を設け論じたい。

以上のことや、六世空巖慧や十世明極聡愚などが弟子について一切伝わっていないことをふまえると、この三僧以外の住持も大覚派であった可能性は高いのではないか。覚満禪師と言われた空巖慧などの時代の円福寺は相当に繁栄していたようだ。南北朝の観応年間の頃に書かれた宗久の『都のつと』<sup>(66)</sup>に「此所に、円福寺とて寺あり、覚満禪師開山の地也。僧衆百人寺住すとかや。」とあって、空巖慧を円福寺の開山の如く記していることは、そう信じられるだけ当時繁栄していたと見るべきなのかもしれない。復庵宗己の法雲寺との関わりも見つけることが出来たことから、

他派の流入も当然あったと考えられるが、以上のことをふまえれば空巖慧の弟子や明極聡愚の弟子、もしくは現今に名や系統が知られていない大覚派の僧によって円福寺が守られていたのかもしれない。

ただし、蘭溪道隆の伝記「蘭溪和尚行実」<sup>(67)</sup>には、松島への下向のことは記されていないので、松島下向や円福寺の住持については、後の加筆等の可能性を拭うことが出来ない。しかし、「無象和尚行状記」<sup>(68)</sup>によれば、「於是大覚禪師寄跡於甲州、或居奥之松島、師随之作伴。」とあって、蘭溪道隆と無象静照（一二三四―一三〇六）は、文永十一年（一二七四）頃より師弟で甲州と松島を訪れていることが知られる。しかも、前述したように無隠円範が文永四年（一二六七）に円福寺の住持をしており、蘭溪道隆に参じているのである。また、円福寺が大覚派によって守られていたことなどを考えると、この蘭溪道隆が円福寺の住持をしていたということも、可能性が無いとは言いきれない。そこで、後に蘭溪道隆が円福寺を訪れていることを踏まえた上で、蘭溪道隆の円福寺の住持に関しても再考察を試みておきたい。

#### 蘭溪道隆と松島

蘭溪道隆といえは、大覚禪師と言われ、禅宗史に名を残す渡来僧である。蘭溪道隆の伝記は、「蘭溪和尚行実」や「元亨釈書」巻六「宋国道隆」の章に語られており、すでに広く知られていることから、本稿ではその伝記の詳細については省略し、ここでは松島への下向を中心に考察を進めたい。蘭溪道隆は四川省涪江の人で、十三歳の時に成都の大慈寺で出家し、無準師範・痴絶道冲・北磻居簡などに参じ、無明慧性（一二六一―一二三七）の法を継いだ。寛元四年（一二四六）に九州の大宰府にいたる。その後、京都の泉涌寺の来迎院に寓居し、ほどなく宝治二年（一二四八）頃には鎌倉に下向している。鎌倉では、初め寿福寺に寓居し、次に同年十二月に常楽寺に住している。建長元年（一

二四九)には、後に鎌倉五山の第一位になる建長寺に開山として住持をつとめている。その後、弘長二年(二六二)に建仁寺に住し、期間は三年とあるので、文永元年(二六四)にはその職を退いたことになる。その後、文永二年(二六五)に元菴普寧(一一九七—一二七六)の後を受け建長寺に再住するのである。「吾妻鏡」<sup>(70)</sup>によれば、翌文永二年(二六五)十月二十五日に北条時頼(一二二七—一二六三)三回忌の仏事の導師を務めている。また、恐らくは、文永十一年(一二七四)頃であろうが、多くの僧伝資料は、流言によって甲州に配流されたことを挙げています。しかし、前述したように「無象和尚行状記」には、甲州だけではなく、松島にも下向していることが記されている。配流の期間はおおよそ三年ほどであったと言われ、再び鎌倉に戻り、寿福寺や甲州を往復し、弘安元年(二七八)四月に三たび建長寺の住持になり、同年七月に示寂するのである。

さて、以上の蘭溪道隆の伝記と、「頼賢の碑」や円福寺の歴住より導き出される類推をここに提示したいと思う。まず、文永四年(一二六七)に無隠円範が円福寺の住持であったことは、新たな事実として確定したのであるから、円福寺歴住に二世蘭溪道隆、三世義翁紹仁とあることは、これより前にならなければならず、そうでなければ勧請としたか、後の増筆となってしまうのである。ここで、蘭溪道隆の伝記を見ると建長寺住持の頃から、建仁寺の住持までの期間はおおよそそのことが判明している。これは、「大覚禪師語録」の建長六年(二五四)の秋頃に始まる「相州巨福山建長禅寺語録」から、文永元年(一二六四)の一月に至る「山城州北京東山建寧禅寺蘭溪和尚語録」の間の上堂が、上堂のあった月日を数えて行くと、記録されているものだけでも、おおよそ半年の期間が開くことが無いことが知られる。この間に松島の円福寺の住持をすることはかなり難しいように思われる。しかも、前述したように「天台記」によれば正元元年(一二五九)に性西法心が円福寺に住したとしたならば、当然それ以降でなければならぬ。蘭溪道隆が来朝以前に性西法心の師である無準師範に参学していることも重視すべきであろう。

しかし、ここで注目すべきは、建仁寺住持後の一年間の空白である。この間に、松島に下向していたとは考えられ

ないであろうか。蘭溪道隆が松島に赴いているとすれば、多くの弟子も随侍したものと考えられ、急遽帰国することになった兀菴普寧（一一九七—一二七六）に代わり、建長寺に再住するのであるから、文永元年（一二六四）より円福寺に住し、文永二年（一二六五）より急遽建長寺に再住し、その後、円福寺には二世義翁紹仁（？—一二八一）が住持をして、文永四年（一二六七）までには、同じく随侍していた無隠円範が住持をしていたのではないであろうか。年代的には可能であろうと考えられるし、後に甲州からわざわざ無象静照を引き連れて松島に下向していることや、円福寺の歴住を考えれば十分に有り得ると言える。

その後は、無隠円範は円福寺の住持をしばらくしていたと考えられる。恐らく蘭溪道隆の後を継ぎ、その教えに従ってその住持を全うしていたに違いない。しかし、文永十一年（一二七四）—建治二年（一二七六）の間であろうか、期せずして蘭溪道隆が流言によつて、再びこの松島の地を訪れたのである。蘭溪道隆にしてみれば、既に一度住持をしていることや、弟子の無隠円範が住持をしていることに安心していただろうし、松島の景観によつて心癒されたことであろうとも思われる。葉貫磨哉氏は、「西稠子曇行状より見た初期鎌倉禅林——北条時宗禅宗信仰の一断面<sup>(72)</sup>」において、この配流が元寇と期を一にしていることから、この流言が「蘭溪道隆が蒙古の間諜である」といったものではないかとしている。ともかく、蘭溪道隆が松島を訪れていることは曲げようもない事実なのである。そして、その後、再び蘭溪道隆が鎌倉の寿福寺や浄妙寺<sup>(73)</sup>に戻ると無隠円範も蘭溪道隆に随侍したのではないかと考えられる。そこで、その時、恐らく蘭溪道隆の甲州・松島に共に随侍したと思われる桑田道海が、松島に残り円福寺第五世となり、続いて大覚派の空巖慧が六世に住した際に、時に弘安九年（一二八六）であるが、頼賢が無隠円範を円福寺に訪ねた、そこで無隠円範が浄妙寺に遷つていることを知るのである。既に蘭溪道隆は八年前に建長寺において示寂して久しい。

## 鎌倉浄妙寺と松島円福寺

鎌倉の浄妙寺は、明庵栄西(一一四一—一二二五)高弟の退耕行勇(一一六三—一二四二)が開山であり、鎌倉五山の第五位に列せられたこともある古刹である。浄妙寺に所蔵される『稻荷山浄妙禅寺略記』<sup>(74)</sup>によれば、浄妙寺の歴住として無隠円範は記録されていないのが、ただし「頼賢の碑」にも浄妙寺に住したとまでは記されていない。この「浄妙禅寺略記」によれば、五世蘭溪道隆、六世龍江応宣とあり、建治二年(一二七六)から弘安元年(一二七八)まで蘭溪道隆が浄妙寺に住したと記されている。この略記は江戸時代に書かれたと見られ、誤りも多いことは既に指摘があり<sup>(75)</sup>、多少の考察を加えた結果、特に歴住に關しての補足には誤りが多いように思われる。書写した段階で誤りや加筆が生じたであろうことは容易に想像できるため、これを鵜呑みにはできない。しかし、その歴住を示す資料はこれ以外には存在しないのであるから、扱いは注意せねばならないがこれを基に考察を加えたい。

さて、注目すべきは六世の龍江応宣であり、この人は蘭溪道隆と共に渡來した直弟である。或は、無隠円範は蘭溪道隆の示寂後、浄妙寺の龍江応宣の元に身を寄せていたのであるうか。規庵祖円なども浄妙寺の龍江応宣の元で参学していることが知られる<sup>(76)</sup>のであるから、無隠円範も浄妙寺の龍江応宣のもとに身を寄せていたとも考えられる。その後、無隠円範は、既に前述した通り建仁寺に住し、続いて西礪子曇の後を継ぎ、円覚寺や建長寺に住するのである。円覚寺の住持の期間は不明であるが、建長寺に關しては今回の考察により、恐らく、徳治二年(一一三〇七)の三月より解夏の七月頃までは、少なくとも建長寺に在山していたと考えられる。

さらに、『浄妙禅寺略記』の記述を見てみると、円福寺の歴住として前述した靈巖道昭は浄妙寺の二十三世に、千峰本立は浄妙寺の二十四世に、独照祖輝は浄妙寺の二十世として記録されている。よって、円福寺住持の蘭溪道隆よ

り独照祖輝まで八人の内、実に四人が浄妙寺の住持をし、これに無隠円範を合わせると五人が浄妙寺と関係があったことが判明する。また、浄妙寺の二十世寂慧は、円福寺の十二世海山寂慧のことだと考えられる。これらのことは鎌倉と松島の関係を考える上で大変興味深く、また、大覚派の動向としては、松島円福寺で住持をし、もしくは参学した後に鎌倉へ至るといった修行の行程が存在したのかもしれない。復庵宗己が円福寺の空巖慧のもとに参学していることはこの一例と言えるであろう。ただし、鎌倉浄妙寺と松島円福寺、共に歴住に関する正確な資料がないことは悔やまれる。

### 官寺としての円福寺

さて、以上の考察により、円福寺は鎌倉時代においてかなり壮大な規模の寺院であったことがうかがえる。また、性西法心や蘭溪道隆、無隠円範や桑田道海など禅宗史に名を残す数々の名僧が住していたことも知ることが出来た。さらに、円福寺の創建当時には、奥州にはこれほどの禅宗寺院は他に存在しなかったのであるから、奥州のみならず鎌倉などにおいても相当に注目を集めた寺院であつたらうと考えられる。

そのことを物語る上で注目すべきは、円福寺は、関東御折袴所の一つであつたと言つて入間田宣夫氏の「中世の松島寺」に挙げられていることである。入間田宣夫氏の詳細な考察は紙面の都合上その全てを挙げる事が出来ない。この考察に用いた文書を中心に概略をここに挙げてみたい。

まず『金沢文庫古文書』七輯所務文書篇に所収される鎌倉後期と推測される断簡「社寺交名」<sup>(7)</sup>を引用している。その断簡には、東海道二カ国・東山道八カ国・北陸道七カ国・山陰道三カ国の社寺名が記録されているのであるが、その中に「陸奥国 松島日河」と「出羽国 立石寺」との記述があることを紹介している。次に、円福寺に現存する文

書「陸奥国松島円福寺雜掌景顛謹言上」<sup>(78)</sup>と「松嶋円福寺々領同寺用米證狀注文」<sup>(79)</sup>により、さらには同じく東北出羽国で関東御祈禱所であった立石寺との比較をしている。その結果として前述の「社寺交名」は関東御祈禱所のリストであったのではないかと推測され、また以上の文献を総合的に判断して円福寺が関東御祈禱所であったのではないかとその説を挙げている。この説は、「陸奥国松島円福寺雜掌景顛謹言上」の文中に、「成將軍御祈願寺以降」と記されることが、最たる典拠になりうると思われる。円福寺の名声や規模、数々の名僧が住した世代などを考えれば、円福寺が関東御祈禱所となっていたとしても全く不思議ではなく、むしろ当然の成り行きであったとも言える。よって、円福寺は関東御祈禱所であったとする説は、その可能性が十分にありえると言える。

そこで、さらに官寺としての円福寺の考察を加えておきたい。つまり、円福寺が十刹の一つであったということである。十刹とは、中国の五山十刹の制にならって制定された日本の官寺機構の一で、五山の次に位し、諸山の上に位する寺格。その特色は、五山が京・鎌倉の中央叢林に限られていたのに対し、全国各地にわたって制定された。時代とともにその数も増加し、十刹は十個寺という従来の定数が破られ、五山に次ぐ寺格という意味をもつようになったものである。五山については、今枝愛眞氏の「禪宗の官寺機構——五山十刹諸山の国別分布について——」<sup>(80)</sup>を参照した。これによると、鎌倉時代の末期にはすでに十刹や諸山が存在していたであろうとしている。

鎌倉・室町時代に、これほど繁栄し名僧が住していた寺院であった円福寺であるので、恐らく十刹か、少なくとも諸山の寺格があったであろうと推測して調べてみると、『和漢禪刹次第』<sup>(81)</sup>には、十刹として六十個寺をあげており、その中に奥州の円福寺を確認し、さらに、『扶桑五山記』<sup>(82)</sup>によつて、その位次の変遷を見ることが出来るが、その中にも奥州の円福寺を見出すことができる。つまりは、円福寺は十刹の一つであったことを知ることが出来る。ただし、『蔭涼軒日録』の延徳四年（二四八二）六月二日條<sup>(83)</sup>には、等持寺所蔵の「諸十刹位次第一」によつた四十六個寺のなかには、奥州の円福寺の名は見えないので、いつごろから十刹に列せられたかは確認できない。

すでに、今枝愛真氏の論文中に指摘があるが、中巖円月（一三〇〇～一三七五）の『東海一漚集』には、円福寺の名を見ることができ、その時は諸山であることが記されている。そこで、『東海一漚集』によってその根拠となる箇所を紹介すると、

松島請廉谿疏

松儀靈禽、山擁寶雲、乃父之有師法可鑑也。霧消碧嶼、濤翻紅日、惟土之産傑人亦宜哉。既見聳壑昂賓。何妨推門人白。恭惟（某人）宗門宿將、梵苑良材。胸襟不言可知、曾掌史筆於大鑑法席。位貌自然而重、屢分禪座於千光道場。學識非復吳下阿蒙。勳業亦有江西馬祖。夾道瞻望、羨榮衣錦而歸。踵門挨拶、待垂烹金之手。<sup>(84)</sup>

と記されている。「松島請廉谿疏」が書かれた頃の年代は特定できないため、今枝愛真氏は少なくとも中巖円月の示した永和元年（一三七五）までには諸山であったとしている。廉谿は、円福寺十九世の廉溪秀夫のことである。円福寺二十二世の高山守原によって書かれた「松島舍利伝記」<sup>(85)</sup>の年記は貞治五年（一三六六）であるので、「松島請廉谿疏」が記されたのは、少なくとも貞治五年（一三六六）まではさかのほることができると解される。恐らくかなり早い段階で諸山に列せられていたのであろう。また、前述した円福寺に現存する文書「陸奥国松島円福寺雑掌景韻謹言上」と「松嶋円福寺々領同寺用米證状注文」に見える、現存していない数々の文書は、この官寺であったことの名残なのかもしれない。さらに、室町時代の前期に官寺であったことなどは、円福寺が関東御祈祷所であった可能性を高めるといえよう。

頼賢に参学した夢窓疎石

他にここで注目すべきは、夢窓疎石についてであろう。『夢窓国師年譜』の正安二年（一三〇〇）の項<sup>(86)</sup>には、

秋出巨福、訪舊識於羽州。途中而聞彼訃、止息于奥州松島寺。去寺不遠有法師。乃草河真觀上人門弟也。講天台止觀有辯利訓諸理。師聞之心生歡喜。一夜端坐、深更忽覺、日來所聞、而未決之。諸宗差別異旨、分明源前。猶如種種珍果、和盤托出。一見便見爾。從此智辯聰敏、談論無畏。又自謂、只是夙生聞熏種子。而今為些々禪定力、所激發故爾、非眞實悟耳。(後略)

とあり、松島の法師に参じたことを示す一文が存在する。このことは既に先学<sup>(87)</sup>に指摘があり、先学ではこの法師が頼賢を指すとしているが、頼賢であると明記した箇所が存在するわけではない。では、いったいこの法師とは誰を指すのであろうか。時代を考えれば頼賢を示している可能性は十分にあり、恐らく「止息于奥州松島寺。去寺不遠有法師。」とあるのは、雄島を指していると考えられる。しかし、この一文からでは、この法師が頼賢であることを断定することは難しいように考えられる。また、無隠円範・円爾・蘭溪道隆・大休正念という当時を代表する希代の禅僧に学び、再び禅僧である無隠円範に参じようとした頼賢が天台止觀を講じているというのは多少なり疑問が存する。ただし、『夢窓国師年譜』や『夢窓国師塔銘』<sup>(88)</sup>には、夢窓疎石が頼賢の師である無隠円範に幼少の頃建仁寺において学んでいることが記されていることは、前述した通りであり、夢窓疎石が頼賢に参じたのは無隠円範の指導に依ったからとも考えられ、その関係を伺い知る良い一例と言えよう。

また、この法師が頼賢で有った場合には、頼賢の天台の師は草河の真觀上人ということになる。真觀上人とは天祐思順(一一三頃不明)のことである。高橋秀栄氏が「入宋僧天祐思順について」<sup>(89)</sup>において述べられており、その生年も高橋秀栄氏の説に依る。天祐思順の伝記は『延宝伝灯録』巻一「京兆草河勝林寺天祐思順禅師」の章や『本朝高僧伝』巻十九「洛東勝林寺沙門思順伝」<sup>(91)</sup>に収められている。ただし、その行実はいまだ説明されているわけではなく、不明であると言えるであろう。天祐思順は入宋して北碭居簡(一一六四―一二四六)に参じてその法を嗣いでいる。高橋秀栄氏の指摘によれば、尊経閣文庫所蔵『古書雜記』の「四明祖承図」という系図より、在宋中に北峯宗印法嗣の

古雲元粹などや、同じく北峯宗印法嗣の日本の俊苒(一一六六一一二二七)などの天台の諸師にも参学している。「法灯国師行実年譜」<sup>(92)</sup>に依れば、心地覚心(一二〇七—一二九八)が天祐思順に学んでいることが知れるのであるから、天祐思順の門弟が頼賢のことを指すとしたならば、頼賢は心地覚心と同門であったことになる。

心地覚心は、高野山に登って密教を伝法院の覚仏や正智院の道範にうけ、さらに高野山金剛三昧院にいた退耕行勇について葉上流の台密禅を学び、更には深草興聖寺の道元に菩薩戒を授かっている。ちなみに、道元は天祐思順の師である俊苒に参じていたらしい、そのことは納富常天氏が「俊苒と道元」<sup>(93)</sup>で既に指摘されている。心地覚心は宝治二年(一二四八)に勝林寺の天祐思順に参じて、後に入宋して径山の癡絶道冲(一一六九—一二五〇)に参じ、「無門関」の著者として知られる無門慧開(一一八三—一二六〇)の法嗣となり、帰朝したのである。天祐思順門弟が頼賢であるならば、もともと天台や真言を学んでいた頼賢が天祐思順への参学をきっかけに禅に接し、松島円福寺の無隠円範に学んだということになる。よって、正安二年(一二三〇)の秋に、円福寺より遠からざる所(恐らくは雄島)に、頼賢活躍の同時期に天祐思順の門弟がいたということになるが、これが頼賢その人であるかは確定できなかった。ただし、夢窓疎石が参じた法師は、やはり頼賢であった可能性が高いといえよう。

また、夢窓疎石が参学を試みた羽州の舊識とは、了然法明のことを指しているのではないか。ほかに、この時代に、羽州で高名な禅僧がいつさい知られていない。了然法明については、佐藤秀孝氏の「出羽玉泉寺開山の了然法明について——道元禅師に参じた高麗僧——」<sup>(94)</sup>に詳しい。了然法明は、径山の無準師範に参学し、道元に参じた高麗出身の僧侶として、京都や鎌倉でも名が知られ、それゆえに、夢窓疎石が遠く羽州まで参学に訪れようとしたのではないかと推測されるのである。また、同じく無準師範に嗣法した、性西法心も松島の円福寺に住持を勤めているわけである。無準師範門弟の二僧が、東北地方で住持を勤めていたことは、注目すべきであろう。よって、了然法明の示寂年は、正安二年(一二三〇)であった可能性が存する。東北の地に、無準師範の門弟を引き付けるなかが存していたのか

もしれない。

おわりに

今回の「頼賢の碑」の考察によって、松島円福寺の禅宗史のみならず、東北地方の仏教史にかかわる歴史的な考察を試みることができた。まず松島で活躍した頼賢を中心に、見仏上人や性西法心などの禅僧についての考察をすることができた。さらに、数点であるが、無隠円範についての新たな事実が判明したことは大きいと言えよう。この事実を基に、既出の資料や、歴史的背景を総合的に考察して、この松島における蘭溪道隆や、無隠円範を中心に大覚派の動向を探ることが出来たのではないかと思われる。この考察によって、日本の初期禅宗の展開にとって、特に蘭溪道隆の大覚派にとって松島円福寺が重要な位置を占めていることが判明したのではないか。寺格は当然五山に及ぶものでは無かったのかもしれないが、鎌倉・京都以外の寺院の中では相当に重要な寺院であり、大覚派にとっては活躍の中心寺院の一つであり、鎌倉や京都の寺院に昇住する足がかりとなっていたのかもしれない。しかも、多くの語録中に松島円福寺に関する記述が見られたことは、当時の禅僧たちの間に松島円福寺が、相当に名が通っていたことをうかがえるとと言える。恐らく、日本の初期禅宗の展開においても、重要な役割を果たしていたと考えられる。資料の制約もあり、多くの類推をせざるを得なかったが、これまで頼賢や見仏上人を語る上でしか考察されたことが無かった「頼賢の碑」の考察によって歴史的実事が判明し、それによって、松島と大覚派を中心とした歴史的な意義、並びに、東北地方の仏教史や禅宗史に関する歴史的な考察ができたことは大きいと言えよう。

(付記) 平成十七年十月五日と六日に、松島瑞巖寺に赴き、現地調査を行いました。その際、ちようと瑞巖寺宝物館において「特

別展霊場松島」が開かれており、普段展示されていない瑞巖寺に伝来する数々の貴重な文書を拝見することが出来ました。さらに、瑞巖寺宝物館の学芸員である堀野宗俊氏のご好意により、「頼賢の碑」の原碑を拝見させて頂きました。また、堀野宗俊氏をはじめ宝物館の方々には、大変ご親切にいただき、多大なるご助力・ご助言を頂きました。この場を借りて深くお礼申し上げます。

本稿制作にあたっては、駒澤大学の佐藤秀孝先生に指導を賜りました。深くお礼を申し上げます。深くお礼を申し上げます。

## 註

- (1) 瑞巖寺宝物館には「頼賢の碑」の精巧なレプリカが展示されている。
- (2) 「頼賢の碑」の概観の記述は、松本源吉氏の「松島雄島の頼賢の碑」(後出)と宮城いしぶみ会の「松島の板碑と歴史」(後出)の調査を参考にした。
- (3) 「松島町史」資料編Ⅰ、松島町、一九八九年、五二八、五二九頁
- (4) 「宮城郡誌」、宮城郡教育会、一九七二年、八一五・八一六頁
- (5) 「宮城県史」十七(金石志)、宮城県、一九五六年、二三六頁
- (6) 松本源吉「松島雄島の頼賢の碑(上)」(「仙台郷土研究」第八卷三号、一九三八年)三二・三三頁と「松島雄島の頼賢の碑(下)」(「仙台郷土研究」第八卷四号、一九三八年)三六・三八頁
- (7) 七海雅人「松島」(「霊地・霊場・聖地」東北考古学会第十一回研究大会(宮城大会)資料集、二〇〇五年)一一、
- (8) 「松島の板碑と歴史」、宮城いしぶみ会、一九八二年
- (9) 「建長寺史」編年史料編、第一卷、二〇〇三年、三〇六・三〇八頁
- (10) 「統禪林墨蹟」上巻、禪林墨蹟刊行会、一九六五年、一三〇「一山一寧墨蹟跋語」
- (11) 贊寧は、『宋高僧伝』の撰者。『宋高僧伝』は宋端拱元年(九八八)の成立で、宋の太宗の勅を奉じて贊寧等が撰した。全体が一〇科(訳経・義解・習禪・明律・護法・感通・遺身・説誦・興福・雜貨声徳)に分かれており、「頼賢の碑」の中で「興福」と記されているのはこの十科内の一科を指す。
- (12) 虎関師鍊「元亨釈書」巻九、「松島寺見仏」の章(「大日本仏教全書」巻六十二、鈴木学術財団、一九七二年)一一七頁
- (13) 「天台記」(「松島町史」資料編Ⅱ、松島町、一九八九年)一九・二二頁
- (14) 「瑞巖寺の歴史」、瑞巖寺、一九九七年

- (15) 西行仮託『撰集抄』(『大日本仏教全書』卷一四七、仏書刊行会、一九八三年) 三三一、三三三頁
- (16) 堀野宗俊氏より、「居処如平居時」と記されていることから、この「頼賢の碑」が書かれた時点では、頼賢はいまだ存命中であったのではないかと、との指摘を受けた。この指摘を受け、再び内容の考察を行った結果、やはり一山一寧が「頼賢の碑」を撰した時には頼賢は存命中であったと考える方が妥当と考えられる。ただし、立石された時点においても頼賢が存命中していたか否かは定かではない。
- (17) 入間田宣夫氏の研究には「中世の松島寺」(『宮城の研究』第三卷、一九八三年) 四八・九九頁・「古代・中世の松島寺」(『松島町史』通史編Ⅱ、松島町、一九八九年) 一・二二頁・「東の聖地松島——松島寺と雄島の風景」(『よみがえる中世』七、一九九二年) 一六七・一八七頁などがある。本稿制作にあたり大いに参考にさせて頂いた。
- (18) 『宮城県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第四、宮城県史蹟名勝天然記念物調査会、一九二三年、三一・三四頁
- (19) 久富哲雄「『曾良旅日記』と雄島の頼賢の碑」(『芭蕉曾良 等躬——資料と考察』、二〇〇四年) 一一二・一一二七頁
- (20) 『曾良旅日記』(『おくのほそ道』、岩波書店、岩波クラシックス8、一九八三年) 一〇一・一〇二頁
- (21) 『総合仏教大辞典』、法蔵館、一九八七年、一四三八頁
- (22) 佐藤秀孝「越前永徳寺義準と意教上人頼賢——義準の永平寺僧団離脱前後の動静について——」(『宗学研究』四十五、二〇〇二年) 一一五・一二〇頁
- (23) 「一山国師行記」(『統群書類従』第九輯上、一九二七年) 三八七・三九〇頁
- (24) 虎関師鍊「元亨釈書」第八、「宋一寧」の章(『大日本仏教全書』卷六十二、鈴木学術財団、一九七二年) 一〇九頁
- (25) 「一山国師語録」(『大正新脩大藏経』第八〇卷、統諸宗部十一、一九三二年) 三三三・三三三頁
- (26) 「一山国師語録」(『大正新脩大藏経』第八〇卷、統諸宗部十一、一九三二年) 三二七・三二八頁
- (27) 『海蔵和尚紀年録』(『統群書類従』第九輯下、一九二七年) 四六四頁
- (28) 「大応国師語録」(『大正新脩大藏経』第八〇卷、統諸宗部十一、一九三二年) 一一八頁
- (29) 玉村竹二「五山禅僧伝記集成」(『無隠円範』の項、一九八三年、六二五頁)
- (30) 『禅学大辞典』、禅学大辞典編纂所、一九七八年
- (31) 卍元師蛮「延宝伝灯録」卷十六、「相州建長無隠円範禅师」の章(『大日本仏教全書』卷一〇八、仏書刊行会、一九七九年) 二二二頁
- (32) 卍元師蛮「本朝高僧伝」卷二十二、「相州建長寺沙門円範伝」(『大日本仏教全書』卷一〇二、仏書刊行会、一九七九年) 三二五頁
- (33) 玉村竹二「秋潤泉和尚語録」解題、(『五山文学新集』第

- 六卷、一九七二年）一〇四三・一〇五四頁
- (34) 『大覚禪師語録』（大正新脩大藏經）第八〇卷、統諸宗部十一、一九三二年）四六・九四頁
- (35) 『大覚禪師語録』（大正新脩大藏經）第八〇卷、統諸宗部十一、一九三二年）四八頁
- (36) 『大覚禪師語録』（大正新脩大藏經）第八〇卷、統諸宗部十一、一九三二年）八三頁
- (37) 『桃源鈔』（大塚光信『統抄物資料集成』巻八、一九八〇年）一三七頁
- (38) 大石守雄「雲桃鈔の一考察」（『印度学仏教学研究』第四巻第一号、一九五六年）四九六・五〇〇頁
- (39) 『範無隠と大覚録』（『五山文学全集』別巻、一九七三年）八三五・八三六頁
- (40) 『大覚禪師語録』（大正新脩大藏經）第八〇卷、統諸宗部十一、一九三二年）九三頁
- (41) 『臥雲日件録抜尤』第五、「文安五年戊辰四月一日」の条（『大日本古記録』、東京大学資料編纂所、一九六一年）二六頁
- (42) 佐藤秀孝「虚堂智愚と蘭溪道隆——とくに直翁智侃と『蘭谿和尚語録』の校訂をめぐる——」（『禅文化研究所紀要』第二十四号、一九九八年）一二九・一六〇頁
- (43) 『永平元禪師語録』（『曹洞宗全書』宗源下、一九三〇年）三〇・四二頁
- (44) 前述の『瑞巖寺の歴史』によれば、瑞巖寺の慶長十三年（一六〇八）の梵鐘鑄造の経緯を記した撰文中に「号山曰松島名寺曰瑞巖」とある事に始まるという。
- (45) 前掲した入間田宣夫氏の研究の他に、雑誌『歴史手帳』第二十五巻一号（一九九七年）において、小特集「瑞巖寺境内遺跡と中世の松島」として、特集が組まれた。その中には、藤原良章氏の「鎌倉幕府と中世松島寺」など注目すべき論文が多々見られる。
- (46) 前述した入間田宣夫氏の「中世の松島寺」に指摘されている。
- (47) 「松島山円福禪寺住持次第」や「前住松島交名」は、青龍殿開館特別記念展「瑞巖寺と伊達家」（瑞巖寺、一九九七年）三七・三八頁に写真で紹介されており、これを参照した。
- (48) 入間田宣夫氏は、義海を義翁紹仁ではないかとしており、瑞巖寺で刊行された『瑞巖寺の歴史』（瑞巖寺、一九九七年）、青龍殿開館特別記念展「瑞巖寺と伊達家」（瑞巖寺、一九九五年）などでも、義海を義翁紹仁ではないかとしている。
- (49) 『兀菴和尚語録』巻下（『正統藏經』第一二三冊、新文豊編審部編、一九八三年）の「法語」には、「示松島円海長老」が存する。兀庵普寧（一一九八～一二七六）の来朝の期間は、一二六〇年から一二六五年とされている。無隠円範が一二六七年には円福寺の住持をしていることを踏まえれば、義海とは、円海であったのかもしれない。

- (50) 虎関師鍊『元亨釈書』巻六、「松島寺法心」の章（『大日本仏教全書』巻六十二、鈴木学術財団、一九七二年）九九頁
- (51) 無住『沙石集』、『日本古典文学大系』八十五、渡邊綱也校注『沙石集』、一九六六年）四五五・四五八頁
- (52) 鈴木常光『法身覺了無一物——法心禪師真壁平四郎の生涯——』、一九六九年
- (53) 『円覚寺文書』内「北条貞時十三年忌供養記」（鎌倉市史）史料編第二、鎌倉市、一九五六年）七六・一二八頁
- (54) この雲板については、篠崎四郎氏の「瑞巖寺雲板について」（『仙台郷土研究』第六卷十一号）三六七・三七一頁などがある。また、瑞巖寺で刊行された『増補改訂版瑞巖寺誌』（瑞巖寺博物館、一九七六年）などでも、この明極を明極楚俊としているし、「天台記」や「松島山円福禪寺住持次第」でも明極愚を後に直して明極俊とした跡が見られる。「前任松島交名」は明極愚のままである。
- (55) 玉村竹二『五山禅僧伝記集成』「明極聰愚」の項、一九八三年、六一六頁
- (56) 空巖慧に関する先行研究は、堀野宗俊氏の「円福寺6世覚満禪師に関する覚書」（『安部正光君追悼集』二〇〇〇年）一二四・一二五頁がある。
- (57) 『松島諸勝記』（『仙台叢書』第四卷、仙台叢書刊行会、一九三三年）二二一・二四五頁
- (58) 『仙台叢書』第四卷に記される「松島諸勝記」の記述に
- は、この贊文に関して欠落している箇所がある。瑞巖寺宝物館に所蔵される「松島諸勝記」を拝見し「煦」と「曾」の二字を補った。
- (59) 玉村竹二『五山禅林宗派図』、一九八五年
- (60) 『法雲雜記』、駒沢大学図書館、一八九八年
- (61) 『常州大雄山法雲寺開山大光禪寺語録』、静嘉堂文庫所蔵資料、一六八三年
- (62) 復庵宗己の伝記には、『延宝伝灯録』第五、「常州太古山清音寺復庵宗己禪師」の章、九九・一〇〇頁・「本朝高僧伝」第二十八、「常州清音寺沙門宗己伝」三九六・三九七頁などがあり、語録「大光禪師語録」が存在する。
- (63) 宗久『都のつと』（『中世日記紀行集』、新日本古典文学大系五十一、一九九〇年）三五一頁
- (64) 『鏡堂和尚語録』（玉村竹二『五山文学新集』巻六、一九七二年）四五九・四六一頁
- (65) 『東海一漚集』（『五山文学全集』第二卷、一九七三年、五一頁
- (66) 宗久『都のつと』（『中世日記紀行集』、新日本古典文学大系五十一、一九九〇年）三五八頁
- (67) 『蘭溪和尚行実』（『続群書類従』第九輯上、一九二七年）三三三・三三七頁
- (68) 『法海禪師無象和尚行状記』（『続群書類従』第九輯上、一九二七年）三六六・三六九頁
- (69) 虎関師鍊『元亨釈書』巻六、「宋国道隆」の章（『大日本

- 仏教全書』卷六十二、鈴木学術財団、一九七二年) 一〇〇頁  
 (70) 『吾妻鏡』(『新訂増補国史大系』三十六卷、一九八〇年) 八六四頁  
 (71) 『蘭溪和尚行実』・『元亨釈書』第六、「宋国道隆」の章・『延宝伝灯録』第三「相州巨福山建長寺蘭溪道隆禅師」の章、六四・六七頁・『本朝高僧伝』第十九「相州巨福山建長寺沙門道隆伝」二七九・二八二頁  
 (72) 葉貫磨哉「西澗子曇行状より見た初期鎌倉禅林——北条時宗禅宗信仰の一断面——」(『駒沢史学』第二〇、一九七三年) 一・一七頁  
 (73) 諸伝には、蘭溪道隆が浄妙寺に住したとの記載は無いが、本稿では「稲荷山浄妙禅寺略記」の記述により、浄妙寺にも住したとした。ただし、その期間あくまで不明である。  
 (74) 三測美恵子「稲荷山浄妙禅寺略記」(『鎌倉』第六十四号、一九九〇年) 三四・四四頁  
 (75) 前掲の「稲荷山浄妙禅寺略記」や、浅見龍介「浄妙寺の阿弥陀如来立像」(『鎌倉』第六十三号、一九九〇年) 一・一四頁などに指摘がある。  
 (76) 「勅諭南院国師規庵和尚行状」(『統群書類従』第九輯上、一九二七年) 三七五・三七六頁  
 (77) 「社寺交名」(『金沢文庫古文書』七輯、所務文書篇、一九五五年) 三三三頁  
 (78) 「陸奥国松島田福寺雑掌景領謹言上」は青龍殿開館特別記念展「瑞巖寺と伊達家」(瑞巖寺、一九九五年) 三九頁に写真入りで紹介されている。  
 (79) 「松嶋田福寺々領同寺用米證状注文」は青龍殿開館特別記念展「瑞巖寺と伊達家」(瑞巖寺、一九九五年) 三九頁に写真入りで紹介されている。  
 (80) 今枝愛真「禅宗の官寺機構——五山十刹諸山の国別分布について——」(『日本學士院紀要』第十九卷第三号、一九六一年) 八九・一二三頁  
 (81) 「和漢禅刹次第」、駒澤大学図書館、一七四八年  
 (82) 玉村竹二「扶桑五山記」、一九八三年  
 (83) 『蔭涼軒日録』卷五(『大日本仏教全書』第一三七、仏書刊行会、一九七九年) 二三〇四・三三〇六頁  
 (84) 『東海一漚集』(『五山文学全集』第二卷、一九七三年) 五二頁  
 (85) 「松島舍利伝記」は青龍殿開館特別記念展「瑞巖寺と伊達家」(瑞巖寺、一九九五年) 三六頁に写真入りで紹介されている。  
 (86) 「夢窓国師年譜」(『統群書類従』第九輯下、一九二七年) 四九九頁  
 (87) 前述した入間田宣夫氏の「中世の松島寺」八八頁や、「東の聖地松島——松島寺と雄島の風景」一七四・一七五頁や、佐々久氏が「宮城県史」十二、学問宗教(宮城県、一九六二年) 三二八・三三〇頁などに指摘されている。  
 (88) 「夢窓国師塔銘並序」(『統群書類従』第九輯下、一九二

七年) 五三四・五三九頁

・二七八頁

- (89) 高橋秀栄「入宋僧天祐思順について」(『印度学仏教学研究』第四十九卷第一号、二〇〇二年) 二二六・二三〇頁
- (90) 『延宝伝灯録』卷一、「京兆草河勝林寺天祐思順禪師」の章(『大日本仏教全書』卷一〇八、仏書刊行会、一九七九年) 五三頁
- (91) 『本朝高僧伝』卷十九、「洛東勝林寺沙門思順伝」(『大日本仏教全書』卷一〇二、仏書刊行会、一九七九年) 二七七
- (92) 『法灯国師行実年譜』(『続群書類従』第九輯上、一九二七年) 三四七・三六一頁
- (93) 納富常天「俊苒と道元」(『印度学仏教学研究』第二十三卷第一号、一九七四年) 一一四・一二二頁
- (94) 佐藤秀孝「出羽玉泉寺開山の了然法明について——道元禪師に参じた高麗僧——」(『駒澤大学仏教学部研究紀要』第五十二号、一九九四年) 二〇一・二五六頁